

Good Nurse 研究にみる 東アジア国際共同研究の 意義・方法論・成果

いま、東アジアの看護研究者とわが国の看護研究者とのつながりが深まっている。しかし、2003(平成15)年10月に、長野県看護大学で異文化看護国際研究集会「新しい風：アジア・太平洋地域の看護学国際協力」^註を開催したころは、この地域の交流や共同研究はいまほど活発ではなかった。

東アジア地域との連携の重要性を指摘されたのは、当時長野県看護大学の教授であった Anne J. Davis 博士(現長野県看護大学, University of California, San Francisco 名誉教授)である。西洋の看護研究者である Davis 先生は、日本の歴史や文化を常に謙虚な姿勢で尊敬し、その知識は日本人である私たちよりも豊かなほどだった。いつも言っておられたのは、「東アジアから世界への看護の知の発信がまだ少ない。しかしこの地域には儒教の長い歴史とその影響を色濃くもつ豊かな文化があり、それを発信することは世界の看護をもっと豊かにするのではないか」ということだった。上述の国際研究集会は、Davis 先生の側面支援で実現した。本焦点で紹介する Good Nurse 研究は、その研究集会での看護倫理グループのミーティングから生まれたものである。

Good Nurse 研究の意義は数多い。そのなかで真っ先にあげるべきは、「患者から学ぶ」ということではないだろうか。「よい看護師とは？」という問いは、看護の中心テーマである。臨床では、看護師たちは「よい看護師」をめざして実践しているし、教育では、「よい看護師」を育てることを目的に授業が行なわれている。そして政策面では、「よい看護師」たちが「よい看護」ができるよう、マンパワーの充実と職場環境の向上への努力が続けられている。しかし、その「よい看護師」とは、どのような看護師をいうのだろうか。看護師が第一の倫理的責務を果たすべき対象は患者であることを考えると、患者が病いの体験を通し

て語る「よい看護師」のストーリーに耳を傾け、そこから、よい看護師像を描くことが大切ではないだろうか。Good Nurse 研究の出発点はここにあった。当時、看護の中心テーマである「よい看護師とは？」という問いについて、患者に耳を傾けて探索した研究は皆無に等しかった。

本焦点は、この研究プロジェクトにかかわった研究者たちが、Good Nurse 研究から得た学びと、東アジア共同研究の意義、方法論、成果をそれぞれの視点で執筆している。この共同研究の重要な一員であった韓国チームからは、言語面から本焦点に参加いただくことができなかった。しかし、韓国チームの研究代表者嚴英蘭教授(韓国・順天郷大学)教授は、現在 Good Nurse 研究を進展させ、看護師のための「Happiness プロジェクト」を推進している。Good Nurse のキーワードである「good, よい」は、人間を「bad, よくない」ことへのこだわりから解放し、幸福を感じさせる力がある。その発見が Happiness プロジェクトにつながったと、彼女は語ってくれた。

本焦点が、国際共同研究の活性化を促し、特に東アジアを中心とする国々が手を携えながら、「よい看護」「よい看護師」をめぐるさらに意義ある議論につながっていけば幸いである。

註：長野県看護大学看護実践国際研究センター異文化異文化看護国際研究部門(2004)．特集 長野県看護大学異文化看護国際研究集会「新しい風：アジア・太平洋地域の看護学国際協力」．*Quality Nursing*, 10 (5), 3-57.

企画：小西恵美子(佐久大学看護学部教授，長野県看護大学名誉教授，
Good Nurse 研究プロジェクト統括責任者・日本チーム研究代表者)